

戦火に散ったアスリート

大阪タイガース・景浦 將

一発にファンは酔いしれた。

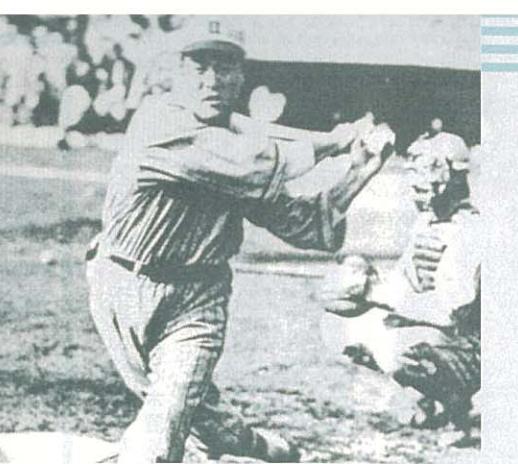
松山商野球部OB会長の景浦 隆男さん（58）は、父・賢一が景浦の弟で、朝日軍（現横浜）の投手。もちろん、隆男さんも大学社会人と野球に打ち込んできた。

マーク・レジェンドねえ……。13ゲーム差をひっくり返して巨人が逆転優勝を決めた夜、梅田界隈では茫然自失の阪神ファンが、無言のまま帰路を急いでいた。駅のベンチで「なんでやねん」と泣き崩れていた醉っ払いの姿が、印象に残った。いつの世も、野球ファンは轟震のチームの勝敗に喜一憂するもの。プロ野球73年の歴史の中で、一番最初に関西のファンを熱狂させたのが、大阪タイガースの中心選手・景浦将（まさる）だろう。戦前の職業野球に残したインパクトは、まさにレジェンドと呼ぶにふさわしい。しかし、東の沢村同様、西の景浦もまた、第2次世界大戦で帰らぬ人となつた。

（新聞うずみ火・吉岡雅史）

巨人軍のエース沢村から
東京 飛び込むホームラン

遙か昔のスターである景浦の名前ぐらいは聞いたことがある。でも、どんな選手だったかよく知らない人は多いかと思う。漫画『ある有名なエピソードだが……』筆者もそうだが、みんなビックリするのは、タイガースの初代背番号6が景浦だったこと。タテジマの6といえば、いまや“アニキ”金本が、ファンの期待と憧れを一身に背負っている。



景浦の遺骨は「石」口3つ

延長11回、とうとう動けなくなつた景浦の横を、サヨナラの打球がすりぬけていった。春夏連覇は逃したもの、景浦の闘志は観客の心を打つた。
「豪快なイメージばかりが伝えられてますが、性格は逆だったみたいと聞いてます」と隆男さんはずつと話している。それでも家族思いなところがあると聞いて

さんは話す。

そもそも立教大学を2年で中

退してプロ入りした理由も、実家

の製材業を支援するためだった。

しかし、その2年間にも、景浦

チームメートに豪打を示していた。

立教といえば、のちに長嶋茂雄が

入学するが、「飛距離では景浦に

は到底及ばない」と、OBたちは

話を大阪タイガース時代に戻

そう。契約最終年度となるはずだ

つた40年に景浦は応召された。43

年に復帰したが、登板することも

なく、2割1分6厘と自身最低打

率を残すと、松山に戻つて家業を

打ったあと、打席付近で

ボールの焦げる臭いが：

「打ったあと、打席周辺でボーラーの焦げる臭いがした」と監

督と確執があつて、飛んできた打球を追わなかつたことなど。特に、ホームランを打つて、ベニチに向かつて指を1本立てながらベースを1周したのは「10円いただき」という念押しだつた。

大卒の初任給が40円の頃である。バッティングもさることながら、ピッチングでも豪傑だった。プロ1年目は投手として最優秀防御率（1・05）と最高勝率（6勝0敗）のタイトルに輝いた。翌37年は、春は打点王、秋は首位打者を獲得し、「4番ピッチャー」も何試合か務め、タイガースを日本一へ押し上げた。

闘将の原点は、松山商時代にすでにあつた。中学5年の春に選抜優勝、そして夏の甲子園でも決勝進出。同点の9回裏、ライナーを左ひざに受け骨折するが、ベンチには引つ込みサードを守つた。

中京商のバント攻撃に耐えたが、

4番バッターで、ピッチャー打点王、首位打者、最優秀防御率

